

大学生時代の矢部貞治（4）

A Basic Study on Teiji Yabe's student days at Tokyo Imperial University (4)

大谷伸治*

Shinji OHTANI*

要旨

本稿の目的は、矢部貞治（東京帝国大学法学部教授・政治学）が大学生時代に受講した講義を特定し、教授たちからどのような影響を受けたのかを考察することである。（4）では、矢部が2年次に執筆した帝国主義に関する論文で国際社会主義の理想を抱き、やがて朝鮮で植民政策学者として働く夢をもったが、政治学者へ進路を変更させたのは矢内原忠雄（植民政策）であったことを明らかにした。また、南原繁（政治哲学）の講義筆記ノートについて若干の分析をおこなった。

キーワード：矢部貞治 国際社会主義 植民政策学 矢内原忠雄 南原繁

10. 小寺懸賞論文「帝国主義の経済的考察」

—世界国家と国際社会主義の理想—

2年生になって土方成美に出会い経済学に対する関心を高めた矢部は、衆議院議員小寺謙吉の寄附金をもとにした小寺懸賞論文「帝国主義の経済的考察」を執筆した。1924年6月13日、内務省社会局の遊佐敏彦¹²¹⁾を訪ねて協調会図書館への紹介状をもらい、調査を始めた。上野の帝国図書館、早稲田大学図書館にも熱心に通って調査を重ねた。執筆は9月末頃から始め、11月27日に書き終えた¹²²⁾。書き終えた心境をこう綴っている。「一九二四年十一月廿七日午前九時世分！ 約半ヶ年に亘る苦心の結晶たる論文が出来上った。題を「帝国主義の経済的考察」と云ひ、原稿紙百六十一枚に及ぶ長篇だ。通読して見れば固より貧弱なことが鼻につく。然し思へば、新緑の夏の初め、協調会の図書館で勉強を初めてから半年になる。その間、若松に帰省して磐梯山を攀ぢる時にも帝国主義を考へ、昼寝の後天井を見つめる暫くをも、帝国主義の為に占領せられた。あのむし暑い八月一杯を毎日々々弁当を持って或は協調会に或は上野の図書館に通ひ続けた苦しさを思っても涙ぐましい気になる。漸く夏が去って秋の気が吹き初めた頃、多摩川に沿ふた街道

を歩きながら帝国主義の思想上の地位を考へたことは未だ記憶の中に生きてゐる。秋が鉗^{ママ}となった。躍り立つばかりの快晴が誘ふ時にも俺はずっと俺の部屋に又は図書館に筆をとり続けた。友人を訪問せず、親戚も訪れずひたすら之に向つてゐる中に秋も老いてしまった。今これから寒い木枯の冬が訪れようとしてゐる時、この論文が漸く出来上つたのだ。俺の一生の中でクリエーションらしいものの初めてのものだ。転々感慨が深いのも無理からぬことだらう。この一週間ばかり学校にも出ず朝から晩まで書き続けた苦しさも、漸く書き上げた時の喜びの前に直ぐに消えてしまった。この論文が選に入ると否とは問題ではない。俺は只この俺の論文の俺に与へて呉れた多くの知識と努力の勝利とを享樂するのみである」（1924年11月27日条）。初めて長編の論文を書いて、研究の苦しさとそれ以上の面白さを実感したことが窺える。結果、矢部の論文は三等を受賞した¹²³⁾（1925年2月24日条）。

この論文原本が政策研究大学院大学に残っている¹²⁴⁾。目次は以下の通りである。

第一章 緒論

帝国主義の意義、その範囲—本論文の構造

第二章 帝国主義経済の歴史

一、国民主義（Nationalism）と帝国主義

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

二、諸国帝国主義発達の一瞥

独逸／仏蘭西／露国／北米合衆国／日本その他／英吉利

三、帝国主義経済発達の一般的説明

経済的動因と非経済的動因との関係／産業革命／工業主義、資本主義の勃興／資本主義と帝国主義

四、羅馬の帝国主義と近代の帝国主義

五、重商主義と帝国主義

第三章 帝国主義経済の基本

一、帝国主義の動因

a. 人口問題／b. 工業国対農業国／c. 投資／d. 鉄鋼業／e. 商業競争

二、帝国主義の基調及手段

a. 独占／b. 軍備／c. 保護／d. 団結／e. 保護関税／f. 特惠関税

第四章 帝国主義に対する批判とその将来

帝国主義の効績／帝国主義の弊害 (a. 資本家の専横 b. 強国弱国の対立 c. 国際競争の白熱化)／帝国主義の現在とその将来¹²⁵⁾

第1～3章で研究動向を整理し、第4章で帝国主義批判と展望を論じる構成である。

参考文献に挙げられている邦語文献としては、土方成美『稿本租税論講義』(有斐閣、1924年)、1年生の時に経済学原論を習った河津暹「植民ノ目的ヲ論シテ諸国戦後ノ植民政策ニ及フ」(牧野英一編『穂積先生還暦祝賀論文集』有斐閣、1915年)、同『経済学講義要綱』(明善社、1924年)があり、聴講した経済学関連の講義での学びをいかして執筆したことが窺える。また、小野塚喜平次「英国ニ於ケル帝国主義トシーリーノ学説」(前掲牧野編『穂積先生還暦祝賀論文集』)、矢内原忠雄『植民政策講義案』第一分冊(1924年)が挙げられていることも注目される。日記によれば、小野塚のシーリー論文は、冬学期に政治学講義で会おう前にすでに読んでいた(1924年9月15日条)。一方、矢内原の講義案は論文清書に取りかかる3日前に読了し、「論文をとところどころ補ふ」ために活用された(11月16日条)。清書の3日前であれば、論文はほぼ完成に近い状態だと思われる。その最終盤に矢内原の講義案が自論を補強するために用いられたということは、矢部が半年間かけて考えてきた帝国主義論と矢内原の植民政策論が似ていたということであろう。実際、矢部は3年生夏学期に矢内原の「殖民政策」講義を受講し、矢内原が帝国主義を講義した日に「色々ノ点デ俺ガ論文デ既ニ述ベタ意見ト合致シテキルノ

デ嬉シカッタカラ、帰ッテ論文ヲ出シテ読ンデ見タ」(1925年5月8日条)と書き留めている。矢部がこの論文の結論で国際社会主義を高らかに謳ったことからすれば(後述)、矢内原と合致する点が多かったことは想像に難くない¹²⁶⁾。

とはいえ、矢部の帝国主義論の基底をなしたのは洋書である。なかでも、パヴロヴィチ(Mikhail Pavlovich)の*The Foundations of Imperialist Policy*(初版1922年)とH・G・ウェルズ(Herbert George Wells)の*The Outline of History*(初版1919～20年、矢部が読んだのはReaders' Edition, 1923)の2冊である。いずれも論文に取り組み始めてすぐに協定会図書館で見つけて、大学を休んでまで熱心に読んだ本である。

矢部は論文に取り組み始めた当初、「あまりびったりと当たった参考書が見当らないので出来るかどうか分らぬ」(6月20条)と多少困っている中で、パヴロヴィチの本を見つけた。「非常に面白かった。休みの前には是非之を読んで行かうと思ふ」(1924年6月27日条)として、翌週に2日間かけて読了し、感想をこう書き留めた。「帝国主義の意味をSejèreの定義と歴史家の定義と社会主義者の定義とに分けて説明したものであるがパヴロヴィチ自身は急進のコミュニストで全くマルクスの説によって更に進んで帝国主義をMetallurgical industryを中心とした資本主義であると定義してある。「帝国主義の経済的考察」に重要なサゼスチョンを与へて呉れたことは事実である。此の本は一面は帝国主義の学術的研究であるけれど他の重要な目的としてブレストリトウス条約に於ける独乙を攻撃する為と又コミュニズムのプロパガンダとの為に書かれた感がある。」(7月4日条)。矢部自身はマルクス主義・共産主義に組したことは一度もない。しかし、帝国主義の学術研究としてパヴロヴィチの著書の意義を認め、重要な示唆を与えられたという。実際、論文をみると、緒論は主としてパヴロヴィチに依拠している。矢部の帝国主義に対する基礎的理解を形成した本といえよう。

一方、パヴロヴィチよりも先に読み始めていたウェルズの*The Outline of History*(6月20条)は、矢部が論文の主張で依拠した最重要文献である。矢部は結論部分で、ウェルズを引きつつ、世界国家、国際社会主義の理想を高らかに謳った。「永遠の平和を享樂し、人と生れしことを誇らんの時は何時ぞや。そは単に武力の戦止みて商業が基本となりたる時にはあらざるなり。資本主義の滅ばん日。帝国主義の逝かん日。之を措いて他にあらざるなり。その向ふところは何ぞ。之

世界国家の理想にあらずや。国際的原料配給の要求とは、即ち国際社会主義（International Socialism）の要求にあらずして何ぞ。先づ努力すべきは国内に於ける資本主義の廃止なり。富の分配を正当ならしめんか、有産無産の対立あることなく、富の不当なる蓄積あることなく、過剰なる資本あることなく、生産の過剰あることなし。国民の生活程度は向上し、欲望は豊かに満足せられん。而らば帝国主義は自ら消滅せんのみ。国際競争なく、強国弱国の対立なく、戦争なく、偏狭の保護なし。〔中略〕即ち総べての原料は「人類の為に」開拓せられ、総べての土地は「人類の為に」供せらるべし。関税の保護あるべからず。移民の排斥あるべからず。宇宙的大宗教が世界国家の宗教となるべし。共通の偉大なる文学がその文学となるべし。その政府は各国家の上に超越する「世界法律」の実施者なるべし。世界国家のナショナリティーは人類そのものなり。各人その我を没し、各国その我を没し、悉く之人類への奉仕、宇宙への信仰なり。かくして人を殺戮し、同胞を傷けん為に費されし莫大の軍備費は止むべし。富多きを為し働くことをせず、貧大なる故に働くこと能はざるが如きものは消滅すべし。人類は健康を喜び、新しき科学によりて労役なくして生産を豊富にし、各人の能力に応じて自由に働き、自由に企て、自由に創造すべし。かくして初めて感激に溢るゝ人類全体の幸福は生るゝなり¹²⁷⁾。1年前の震災復興の決意は内政論であったが、ここではそれを国際秩序論にまで拡大したものといえよう。

もっとも、矢部はその理想の実現を楽観視していたわけではない。「翻って現代の世界史潮を見れば如何。吾人は転々暗雲に閉ざさるゝの感なくんばあらず」として、「世界国家の理想に達する前に於て、尚幾多の国際戦争は行はるべし。悲劇的なる経済の争闘は行はるべし。人種と人種、階級と階級は激烈なる格闘を演出すべきなるべし。就中資本蓄積の撲滅行はれん為には一大惨禍的の革命を要するなるべし」という困難な展望を示す。しかしながら、最後はやはりウェルズを引いて、「さはれ、「拙々と行くも、滑らかに行くも、」世界の進むべきところはその与へられたる宿命の一路のみ。／世界国家へ！ 世界国家へ！／来るべき幾世紀の人類の努力は、この悠久の理想への憧憬ならざるべからず」と締めている¹²⁸⁾。

この論文の分析対象は主に欧米諸国であり、アジア諸国は論じられていない。しかしながら、のちに矢部が「大東亜共栄圏」論¹²⁹⁾を構築する基盤、すなわち帝国主義の基礎的理解や世界史認識はここで形成され

たとみることができる。世界国家と「大東亜共栄圏」論は相反するようは一見思えるが、世界国家という理想に達する前に人種間・階級間の国際戦争を予期しているからである。そして、こうした世界史認識が根底にあったとすれば、敗戦後に「大東亜共栄圏」に代わって、「世界連邦」と「アジア連合」の両立を説き始めたこともまた、なんら不思議ではないだろう¹³⁰⁾。

11. 植民政策学者の夢

— 朴錫胤・安倍能成・矢内原忠雄 —

矢部は、論文「帝国主義の経済的考察」でアジア諸国を直截に論じなかったものの、執筆を通して、植民政策学に関心を抱くようになった。

2年生の終わり頃、論文が三等に当選したことを聞いた直後から、「学者ノ生活ヲ選ビタイ様ナ気ガツクヅクスル」(1925年2月26日条)、「ライフワークトシテ農業政策学者ヲ選ブコトガ頭ヲ離レヌ」(2月27日条)、「勉強最中ニ時々、北海道ノ農科大学研究室デコソツツヤッテキルトコロナド幻ニ描イテ自失スルコトガアル」(3月5日条)と記すようになる。「北海道ノ農科大学」とは、正確には北海道帝国大学農学部(1918年昇格)のことである。ここで農業政策学をやるということは、必然的に植民政策学としてのそれを意味する。北大農学部は周知の通り、日本最初の植民学講座を設置した札幌農学校に端を発し、1907年には東北帝国大学農科大学に昇格し、農政学植民学講座(担任は高岡熊雄)が設置されていたからである¹³¹⁾。

実際、3年生の5月になると、「植民政策」の語が日記に出てくるようになる。そして、関心が北海道から大陸へと移る。直接的なきっかけは2つあった。第一に、後藤新平の満鮮旅行談¹³²⁾を聴いたことである。「満洲経営ノ成功ヲ説イテ、大イニ自重シテ発展センコトヲ力説シ、百年ノ計ヲ以テ目ヲ世界ノ大勢ニ見ヤリ、真ノ植民政策ヲ樹立セヨト教ヘタ。俺ハ悩ンデキタ俺ノライフワークニ対シ多少ノサジェスチョンヲ与ヘラレタ様ナ気ガシタ」(5月6日条)。第二に、柳宗悦『朝鮮とその芸術』(叢文閣、1922年)を読んだことである。結果、「俺ハ兼ネ兼ネ俺ノライフワークトシテ朝鮮ニ働クコトヲ選バウカト思ッテキル」として、その動機を4点にわたって詳細に書き留めた(5月15日条)。長いが全文を引用する。

「第一、俺ハ俺ノ感激ト真剣トヲ他ニ妨ゲラルハコト少クシテ生キタイ。ソレニハ事業ソノモノニ感激ヲ見出シ得ルコトハ、ソレヲ環境ニ妨ゲラルハ

コト少キ所トヲ選バザルヲ得ヌ。朝鮮ハ日本内地ノ他ノアラユル職業ト比シ、ソノ目的ヲ達スルニ便デア。第二、俺ハ少クトモ人類ノ運命ノ趨勢ニタツサワリツ、生キタイ。ソノ為ニハ、舞台ガ大キクナクテハナラナイ。朝鮮ハ右ニ満州ヲ担ヘ、左ニ支那四百余州ヲ有シ奥ニ蒙古ヲ有スル。大陸ノ関門デア。而モ植民政策ノ学問的立場ニ好意ヲ有シ虐ゲラレシ民族ニ同情スベキ信仰ヲ有シ、且ソコニ何等外交官的内容ノ空虚ヲ持タナイ朝鮮生活ハ俺ノコノ希望ニ適フモノデア。帝国主義的政策ヨリ人類ノ永久ノ平和ニ至ルベキ努力ヲ先驅スルニハ絶好ノ土地デア。

第三、俺ハ朴端胤ト云フ先輩ヲ朝鮮ニ有スル。朝鮮ヲモット人間ラシク生活セシメヨト叫ブ彼ノ声ハ俺ト全く同ジデア。彼ト共ニ此ノ朝鮮向上ノ事業ヲ為シ得ルコトハ幸福ニ思ヘルノダ。第四、俺ハ又安倍能成ガ京城大学ノ教授トシテ赴イタコトニ心ヲ惹カレル。東京ハ第二ノ故郷ダト云ッテソノ生活ヲ楽シンデキタ彼。俺ノ性格ガ非常ニ似テキル彼ガ、朝鮮ノ学問ノ為ニ之ニ赴イタコトガ俺ノ心ヲ惹クノダ。」(5月15日条)

第一・第二の動機は、生き方・在り方に関わる動機である。1年生の時には「真剣な」政治家になりたいと言っていたにもかかわらず、2年生の終わり頃から数ヶ月の間に、北海道で農業政策学者、朝鮮で植民政策学者になりたいと二転三転していった矢部の姿はともすれば、講演や本に感化されやすく付和雷同しているように見える。しかし、「真剣」という語に着目すれば、矢部の職業観の根底には一貫して、「真剣な欣求者でありたい」と誓った一高で学んだ人生観、すなわち、新渡戸稲造の言葉を借りれば「to do (為すこと)」より「to be (在ること)」を重視する人格主義があったといえよう。

新渡戸がすでに去った一高で、矢部がこのような人格主義的な人生観・職業観をもったきっかけは、高校2年生の5月に弁論部で開かれた丸山鶴吉(内務官僚、当時は朝鮮総督府警務局長)の講演「朝鮮統治の現状とその将来」であった。内容は、『向陵誌』の弁論部部史によれば、「極東平和の大計に就き武断政策の不可を論じ我等の自覚を促されし事共に貴き果実なる可し」というものであった¹³³⁾。矢部はこの講演を聴いて、「僕は殆んど未知だった多くの事情の如きものを知り得た。然しその問題の中で僕は囚らずも理想と現実との事項に相遇した。」(1921年5月19日条)という。

一高時代の詳しい検討は他日を期すが、矢部は高校入学後ほどなくしていわゆる煩悶青年となり¹³⁴⁾、1年生の春休みには「勉強するのつまらない。世の中に出てつまらない」(1921年4月14日条)と厭世主義者ないし虚無主義者と化していた。厭世観に支配され「如何なる思想生活をなすべきかに苦しんで」いた矢部は、その「解決所」を弁論部に求め入部した(5月6日条)。そして、解決の糸口をすぐさま、丸山の講演から見出したのである。矢部はそれまで「理想と現実との不調和を切実に感じて」「恰もそれは抗ふことの出来ぬ自然現象の様に考へて只只その不調和を歎ずるのみ」であった。しかし、丸山の講演を聴いて、「現在理想と現実との間に大なるギャップがあって現実の世が不調和ならば何故に僕は奮闘以てそのギャップを取除かんことに進まないのか!」「理想——高い理想——を標榜してそれを望み乍ら、我々は総べての困難を切り抜いてこの現実をその理想に近づけるべく努力しなきゃならぬ。そこに我等の生きる意義がある。そして奮闘の価値がある。」「我々は直ちに理想に飛び行くことは出来ない。一步々々先づ現実に於て許さるゝ範囲内に於て、より近づくべく企てなければならぬ。こゝに於て我等の職業と云ふことに思ひ及ばざるを得ない。」と、生きる意義、職業の意義に気付いた。すなわち、職業は生活の安定を得て、円満な思想生活を可能にするという個人的な手段であるだけでなく、各人が自分の能力を最大限活かせる職業に就き「共同」しながら、現実を理想に近づけるべく奮闘することによって社会が成立しているという考えにいたって、思想生活が「実行を伴い得る」意味あるものだと思えるようになった。それゆえに、自分のためのみならず社会・人類のためにも勉学に励み教養を高め、「我等の有する最大の能力がいかなる職業にあるかを知ることがこの向陵三年の先づ第一の任務であるとしなくてはならぬ」として、「真剣に、まじめに、自己の為に、人類の為に！」生きることを決意したのである(5月19日条)。

矢部政治学は周知の通り、最高善「人格の完成」をめざし、「一方に、当為、理想を前提し、他方に存在、現実を基礎とし、この二領域の接合、調和を、その論究の課題とする」政治政策学であった¹³⁵⁾。丸山鶴吉の朝鮮統治に関する講演は、まさに政治学者矢部の原点であったといえよう。

話を戻そう。こうした矢部の一高時代の原点をふまえれば、矢部のなりたい職業が二転三転したのは、講義や研究、講演、読書などを通じて得たものをふまえ

ながら自分の能力を最大限活かせる職業は何か、その都度「真剣に、まじめに、自己の為に、人類の為に」考えた結果だったと捉えることができよう。大学3年生5月の時点では、論文「帝国主義の経済的考察」で世界国家・国際社会主義の理想を抱くようになった矢部は、内地で政治家や農業政策学者になるよりも、「大陸ノ関門」である朝鮮で植民政策学研究会に就く方が、自分の能力を最大限に活かして人類のためにもなると考えるようになっていたのである。

そして、第三・第四の動機を見れば、後藤新平の講演を聴いたり柳宗悦の本を読んだりする前から、朴錫胤パクソギョクと安倍能成という2人との旧交が京城帝国大学への関心——朝鮮で植民政策学研究会に取り組むことは必然的に京城帝国大学で働くことを意味する——を高めるきっかけとなっていたことがわかる。

朴錫胤は、矢部にとって学生寮同志会の2年先輩で、のちに石原莞爾の東亜聯盟論に共鳴し、「満洲国」の外交官僚として活動した「植民地期最高の朝鮮人エリート」である¹³⁶⁾。矢部日記には、小寺懸賞論文に取り組む直前に、朴と話したことが記されている。「後で今日やって来た朴錫胤と話す。正義に感激し勇気に充ちた謙遜な彼をなつかしく思ふ。彼の態度のフェアなことが何よりも気持ちい。朝鮮の内政問題、独立問題、地震の際の虐殺事件、等に論及した。将来朝鮮の大立物となるだらう。俺は日本のヤング・ジェネレーションとは相抱くことが出来ると信ずると云った彼と相担して正義を朝鮮政治に叫びたいと切に感じた」（1924年6月6日条）。小寺懸賞論文に取り組む前から、矢部は朴との交流を通じて朝鮮における植民政策に興味をもっていたのである。論文に取り組む動機の一つにそのことが含まれていたのかもしれない。ただ、「正義を朝鮮政治に叫びたい」というのは政治家であってもできることであろうから、この時点で矢部が朝鮮に行って学者になることまで考えていたとは断定できない。

朴はこの後、京城帝国大学教授候補者として朝鮮総督府在外研究員に選ばれケンブリッジ大学に留学した。矢部は留学中の朴に朝鮮で働くことについて手紙で相談したらしい。朴からの返信は次のようなものであった。「朴さんが手紙を寄越して、俺が大学の方から朝鮮の為に参すことに多大の賛成を示してある。国際聯盟は陰謀外交の延長で、結局は政府と政府ではダメで個人々々の信念と教養の問題だと断じてある点は賛成だ。英国政治学の祖父としてミルを奨め、現代ではラスキが高名だとの事。ケムブリッジのセルウィ

ンコレッチでヒギンス教導の下に学位を得るさうだ。「交戦団体の承認」と云ふ題との事。愚劣な朝鮮人を抱く為には、彼等がかくった過去の歴史と環境とを見た上に、慈愛の悟りを持たなくては到底出来ないと云ふところに涙を覚えた」（1926年1月19日条）。「国際聯盟は陰謀外交の延長」と捉えている点と「朝鮮ヲモット人間ラシク生活セシメヨト叫」びながらも「愚劣な朝鮮人を抱く」と述べている点に、朴がのちに石原莞爾の東亜聯盟論に共鳴していく片鱗がすでに見られるといえよう。朴と「相担して正義を朝鮮政治に叫びたい」と思っていた矢部も、ほぼ同じ認識を共有していたとみてよい。

ただし、矢部は、のちに石原に親炙するようになった朴とは袂を分かたず。1937年12月「北支満洲視察旅行」に出かけた矢部は、北京で朴と偶然再会し「日、鮮、満、支」の問題を論じたが、「石原將軍を礼賛する」朴の議論を「頗る熱烈だが、多くは余りに理想論」だと批判しているからである¹³⁷⁾。だが、これは逆に解せば、矢部はこの段階においても、朴の議論を「理想論」としては認めていたことを意味する。その理想論とは、学生時代に共有したそれであったろう。すなわち、朴は理想論を追い求め続け、石原の東亜聯盟論に親炙した。一方、矢部は長じて、朴のそれを理想論としては認めつつも、より現実に即した植民政策論を構築する必要性を感じるようになり、東亜共同体論・「大東亜共栄圏」論を提唱するにいたったといえる。だとすれば、矢部の東亜共同体論・「大東亜共栄圏」論の源流には、学生時代に朴と共有した朝鮮認識があったとみることができる。

安倍能成の検討に移ろう。安倍は、矢部にとって一高時代の師である¹³⁸⁾。矢部は北海道で農業政策学者になりたいと言い始める少し前に、安倍の『山中雑記』（岩波書店、1924年）を読んでいた。「正午一寸安倍能成ノ山中雑記ノ中ノ「田舎ノ友ニ送ル手紙」ヲ読ンダ。常ニ一道ノ淋シサトニヒリスチックナ愁ヒトヲ以テ人生ヲ見ツメ、自然ノ懷ヲ独り歩ム性格ガ俺トソックリナコトヲ見出シテ懐シクナッタ。アノ飄逸ノ姿ヲ一高ノ教壇上ニ思ヒ出ス」（1925年2月6日条）。「勉強ヲ初メル廿分バカリノ時間ヲ安倍能成ノ「山中雑記」ニ費スノガ近頃ノ僻ダ。今日読ンダトコロニハ新緑ヲ淋シク称ヘター節ガアル。俺ノ感ジト全ク同一ダ。俺ハ能成ガ俺ト或意味デ（而モ俺ノ最モキャラクターリスティック点デ）全ク同ジ世界ニ住ム人デアルコトヲ思フ。ソノ考ヘデ彼ガ朝鮮ノ大学ニ好シク赴任シタコトヲ思フト心事ガ分ル様ナガスル」（2月11日

条)。高校時代の矢部日記に安倍は出てこないが、矢部は高校時代から自分とよく似ている所があるという理由で安倍に親しみを感じていたようである。矢部は『山中雑記』を読んで、安倍を懐かしく思うのと同時に、京城帝国大学へ赴任した安倍の心境に思いを馳せ、自分も後を追いたいという思いを強くしていったことが窺える。また、安倍も日本の植民地支配に同調しており、「兄」である日本が「弟」である朝鮮を導き、実質的な「内鮮融和」を目指していた¹³⁹⁾。この点においても、安部は矢部や朴と通じ合うものがあったといえる。

以上の高校時代から続く4つの動機によって、徐々に朝鮮への思いを募らせていった矢部は、柳宗悦『朝鮮とその芸術』を読んでついに朝鮮行きの決意を固めるにいたる。矢部は既述のように4つの動機を記した後、こう結ぶ。「之等〔4つの動機〕ハ常々俺ノ心ヲ支配シテキタコトダ。ソシテ朝鮮ヲ懐シム之等ノ外ニ更ニ柳宗悦ニヨッテ他ノ一ツノ点ヲ加ヘラレタノデアアル。ソレハ朝鮮ハ悲シイ美シサノ国デアアルト云フコトデアアル。柔カク細イ曲線ガ寂シイ感情ヲ現ハシテキルノダ。寂シイモノノ慰メハ寂シサノ外ニナイ。俺ハ正ニ俺ノ行くベキ所ノ様ナ気ガスルノダ。俺ハ病床ニアッテ朝鮮ノコトバカリ考ヘテ暮シタ。」(1925年5月15日条)。矢部は柳がいう朝鮮の「悲哀の美」に惹かれたのである¹⁴⁰⁾。自らの「悲哀」と朝鮮の「悲哀」を重ね合わせ、自らの寂しさを慰める場所として寂しい朝鮮に行くことを欲した。朝鮮行きはいわば自慰行為なのであった。

ともあれ、矢部の朝鮮行きの決意は、すでに将来を誓い合っていた静子にも手紙で伝えるほどかなり本気であった。静子からは「俺ガ朝鮮ニ行ッテソノ土ニナルナラ私モヨロコンデサウスルノハキマッテキル」と返信が来たという(6月1日条、傍点ママ)。前述した朴錫胤への相談の手紙も、同時期に差し出されたものと思われる。

ところが、矢部は結局、政治学者になった。後年の矢部日記によれば、朝鮮で植民政策学者になることを「断念」させたのは矢内原忠雄であった。矢部は前述の朴錫胤と再会した1937年12月の「北支満洲視察旅行」で、まず朝鮮に渡り京城に宿泊した。その夜、京城帝国大学関係者との酒席でこう語ったと後日書き留めている。「京城に来て切りに思ふのは、嘗つて僕も大学を出たら朝鮮で働きたいとの夢を持ったことだ。僕にこの様な夢を与へたのは、一は柳宗悦の朝鮮論、二は朴錫胤、三は安倍能成先生であったが、僕を断念

せしめた者は矢内原先生であった¹⁴¹⁾」。また、中学時代からの友人・古井喜実は、矢部は「矢内原忠雄博士に教育者になることをすすめられ、政治学の創始者たる恩師小野塚喜平次博士について政治学者への道を進むこととなる」という¹⁴²⁾。

しかし、大学生時代の日記では、矢部が政治学を志す以前に矢内原と話したという記述は見当たらない。政治学をやりたいと日記に初めて出てくるのは、1925年9月28日である。「食後将来ノ仕事ニ干シテ巖チヤント話シ合フ。俺ハ政治学ヲヤリタイ。俺ハ兎ニ角終始人類、世界ノ運命ヲ考ヘテ行キタイ」とある。既述の生き方・在り方の動機が続いていることがわかる。矢部は6月から9月の3ヶ月間に、自分の能力を最大限活かせる職業は政治学者だと思ふようになったのである。しかし、理由まではわからない。高文試験終了後に旧友と酒を呑みながら研究や進路について語り合った日にも、「俺モ政治学デモヤラウト思ッテキルノデ話ガヨク合ッタ。俺ハ俺ノ私カニシテキル決心ヲ皆ニ話シタ」(11月18日条)というが、理由までは書き留めていない。そして、12月7日から小野塚に交渉すべく動き始め、翌年1月19日に小野塚に会い、20日には助手願書を出している(14. で詳述)。矢内原と話したことが日記に出てくるのはこの後(1月25日、2月16日)である。よって、同時代の日記では、矢内原から薦められて政治学者に進路を変更したことは確かめられない。だが、少なくとも進路変更のきっかけが矢内原から与えられたものであったことは間違いなさそうである。

こうして矢部は政治学を志すようになった後、矢内原と2回会って話した。話題は主に朝鮮問題であった。1回目は、「夜大学山上御殿で一高基督教青年会縦の会に出席。田中耕太郎、矢内原忠雄、岡部の諸先生を初め大学、一高生等約二十人集った。僕は矢内原さんと並んで坐って色々話しをすることが出来た。殊に朝鮮のことを話した」(1926年1月25日条)。矢内原は、矢部にとって一高基督教青年会の先輩である。そのつながりで話をする機会を得たのである。弁論部の先輩でもある。単に「話した」ではなく「色々話しをすることが出来た」と記しているところからすれば、矢部が矢内原の隣に座ったのは偶然ではなく、植民政策等について矢内原と話したくて意図的に隣に座ったと思われる。そこで、有益な話が出来たのだろう。2回目には、友人と矢内原の自宅を訪問した。矢内原は次のように語ったという。「先づ朝鮮問題に初まり何を先づ為すべきかにつき、先生は先づ日本が朝鮮を朝

鮮人の為に経営するか、日本自身の征服政策の為にするかを決するを要すとせられ、又個人としては朝鮮人自身のリーダーを努めて我等が作ってやらなければならぬと云はれた。民族の運命問題につき世界を全人類が享樂し得る理想は只神のみ為し得るとせられ、我等は不斷に祈るのみと云はれた。学問と信仰と云ふ問題については帰納と演繹とを併用して信仰を生かし得るものとせられた。その他多くの朝鮮問題、信仰問題を話して四時半辞去。先生に対しては何の準備もない思ひ付きと感情を何等遠慮するところなくぶちまけても而も頗る謙遜に話して下さるのでいかにも懐しい気がする」（2月16日条）。矢部が率直にぶつけた考えや疑問に対して、矢内原は丁寧に対応し、のちに「朝鮮統治の方針」（1926年）にまとめられる主張——自主主義の立場からの同化主義批判と朝鮮議会の設置——や国際社会主義の理想、キリスト教信仰の問題を語った¹⁴³。いずれも矢部の思うところと一致する部分や示唆を与えられる点が多かったと思われる。

このように、矢部は政治学を志すようになった後も、朝鮮や植民政策学への関心を失ったわけではなかった。そして、それらについては、矢内原忠雄との交流で思索を深める機会を得ていたのである。デモクラシー研究に取り組むようになってからも、矢部は朝鮮や植民政策学への関心は失わなかった。大学卒業から10年以上経ってもなお、朝鮮で働きたい夢を与えたのは柳宗悦、朴錫胤、安倍能成であったと学生時代そのままに話ることができる。矢部の思想や行動の根底に3人から受けた影響が流れ続けていることが窺われる。ちなみに、京城の酒席で、矢部は安倍能成と再会した。日記は先ほど引用した部分に続いて、「この様なことを酒間に語ったら世話好きな長谷川さんがわざわざ（くの字点）安倍能成さんのところに電話をかけたと見えて先生がやって来られた。所謂びん髪霜を加ふで年をとられた。併し直接話をして懐しかった¹⁴⁴」とある。つまり、矢部の1937年の「北支満洲視察旅行」は、かつて朝鮮で働く夢を与えられた安倍能成と朴錫胤に再会した旅でもあったのだ。矢部は周知の通り帰国後まもなく、昭和研究会外交スタッフ会への参加を皮切りに、東亜共同体論・「大東亜共栄圏」論を唱え、戦後には「アジア連合」論を展開していく。この点では、矢部が学生時代にライフワークにしたいと思っていた植民政策学は、1937年の「北支満洲視察旅行」での安倍と朴との再会をきっかけに再燃し、生涯続いたと捉えることができよう。その基盤を形成した学生時代に、矢内原忠雄の影響を受けていたことは注目すべ

き点である。今後、この観点から矢部の外交論のさらなる再検討が望まれる。

12. 南原繁 —政治哲学への敬服—

3年生の時に、のちの矢部政治学体系に示唆を与えたのは、南原繁と神川彦松であった。

南原とはすでに2年生冬学期に会っていた。南原は、1924年7月欧州留学から帰国し、冬学期に科外講義「国際政治学序論」を担当した¹⁴⁵。南原の最初の講義である。小野塚が南原の留学を途中から官費に切り替えた際の名目が国際政治の研究であり、その名目で文部省から開設の承認を得た政治学・政治学史第二講座に着任したため、「義理にも国際関係に関する講義を何かしなければならぬ」と命じたという¹⁴⁶。矢部はこの講義に少なくとも1回出席し、「今日はカントの平和論を主として述べておられた。深い哲学的思索の結論を国際政治に適用されて明快に力強く行くところは敬服だ」との感想を抱いた（1924年12月11日条）。周知の通り、この講義は日本初の国際政治学講義であり、のちに論文「カントに於ける国際政治の理念」（1927年）にまとめられる¹⁴⁷。世界国家を理想としていた当時の矢部にとって、カントの永久平和論を題材に、政治学の新領域として政治哲学に立脚した国際政治論を説いた南原の講義に感銘を受けたのは当然といえよう。

そして翌1925年度、南原の最初の政治学史講義が開講された。南原は「国際政治」という講座を置くのはまだ早い、むしろ「小野塚先生の開拓してこられた近代的な政治学という学問のバックグラウンドとしての政治学史」「哲学的な背景をもった歴史学、学史」の講座が必要ではないかと小野塚に相談し認められたのである¹⁴⁸。南原は1925年度以降、国際政治学は神川彦松に任せて、退職する1950年まで政治学史講義を担当し続けた。そして、四半世紀にわたる政治学史講義をもとに『政治理論史』（1962年）をまとめた。

南原は回想で「はじめの三、四年——昭和二年くらいまでは、後に多少、私が研究した政治学史に比べればまことに申しわけない、穴に入りたくないような講義をつづけた¹⁴⁹」と謙遜しているが、はたしてどうだったのだろうか。

矢部日記には、政治学史講義の感想は書かれていない。しかし、講義筆記ノートを残した。ノートの編目構成を抽出したものが表6である。矢部は高文試験の勉強で忙しく6月4日を最後に後半の講義は欠席した

が、その分は後で試験勉強のために友人からノートを借りて筆写している（1926年1月〔1～5日〕条）。したがって、矢部は後半欠席したものの、ノートは南原の初年度講義をすべて網羅したものとなっている。南原研究においても大変貴重な史料といえる。

本格的検討は他日を期すが、編目構成をみると、章節レベルでは『政治理論史¹⁵⁰⁾』の前半とほとんど変わらない状態で初年度から講じていたことがわかる。違いは、『政治理論史』にはない第1篇第2章「羅馬ニ於ケル政治思想」があることくらいである。1936年度講義を受けた丸山眞男は自身のノートと『政治理論史』を比べて、「大きな篇別においても、また個々の思想の分析の仕方においても、またそれぞれへの評価・批判においても、私が想像していたよりもはるかに近似している¹⁵¹⁾」と述べているが、その評価は初年度に遡及されてもよいだろう。項レベルでは、社会制度論の項が設けられていることが興味深い。『政治理論史』では見られない項である。社会制度論の項を立てているのは、政治の定義を「政治ハ人類ガ社会ニヨキ生活ヲ実現セントスル努力ナリ。換言セバ善良ナル社会建設ノ努力ガ政治ナリ¹⁵²⁾」としていることと関係があるように思われる。政治の定義は『政治理論史』に比べかなり簡潔で、「正義」「統制」「共同体」など南原政治哲学の語が見られないものの¹⁵³⁾、フィヒテに取り組み価値並行論を提唱する以前の初期南原政治哲学を知るには、矢部ノートは絶好の史料である。

なお、南原「政治学史」のノートは、衆議院憲政記念館では、整理番号110としてまとめられた政治学関連の10冊のうちの1冊として保管されている。8冊目までは、表紙に「Political Science Allgemeine Staatslehre」「Politics Allgemeine Staatslehre」等と記された主として外国語文献からの抜書である。唯一の邦

語文献は、今中次磨「政治統制の合理的基礎」（『国家学会雑誌』43-8、1929年）である。矢部が助手・助教時代に論文執筆や講義準備で抜書したと推定される¹⁵⁴⁾。南原「政治学史」のノートも矢部の講義準備のために使われ、この包にまとめられていた可能性が高い。ただし、帝大の政治学講義ではなく、法政大学の1934年度「政治学史」講義である。

この講義の開講の辞を記した草稿が残っている¹⁵⁵⁾。「余ハ寧ロ政治思想史ヲ講ズ」との宣言から始まり、政治学史（学説史）と政治思想史の違いを説明しているのだが、南原「政治学史」の緒論の文言と似ている（ただし、南原は政治学説史と政治学史を区別している）。さらにその後、参考文献の紹介、政治現象と国家についての説明が続くが、最後の方は項目だけメモして「帝大ノnoteニ依ル」「大学Note」と記されている。南原「政治学史」のノートとは明記されていないが、文言が似ていたことからすれば、南原のノートの可能性がある。

法政大での講義は矢部にとって初めての政治学史講義であったが、内諾から2週間しかなく、しかも依頼原稿に追われており、初回の準備は前日の夜に急ごしらえでおこなわざるをえなかった。学生時代に受講した南原のノートも参照しつつ準備したが、最後は時間がなく、項目だけ走り書きし、当日はノートを持参し参照しながら講義をしたのではないかと推測される。南原は政治学史講義の集大成である『政治理論史』を刊行するまで自ら講義案を執筆することもなかったから、筆記ノートは南原政治学史を知りうる貴重な資料であった。矢部にとって、教科書と同等の意味をもつものであったと考えられる。

(5) に続く

121) 遊佐敏彦は明治学院神学部卒業後、日暮里の貧民窟に入った社会活動家。1918年、明治学院の先輩賀川豊彦に請われて、神戸生田川口入所の初代所長に就任。1921年にはその功績を買われて、東京地方職業紹介事務局長に招かれ、内務省社会局にいた。矢部がどのような人脈から遊佐を頼ることができたのかは不明だが、社会民主主義に関わる人脈として興味深い。なお、矢部はこの時、「失業問題の参考材料」ももらっている（1924年6月13日条）。遊佐については、遊佐敏彦「過去半世紀を顧みて」（『社会福祉』9、1962年）、三吉明「労働教会史研究序説」（『北星論集』1、1963年）、同「職業紹介事業史考」（『北星論集』10、1973年）参照。

122) 「矢部日記」1924年6月13、16、18、20、27、28、30日条、7月3、4日条、8月5～9、11～15、18～23、25～29日条、9月1～3、5、6、9、10、15、20～27、29、30日条、10月1～4、6、7、9～12、16、18、19、23、24、27、30日条、11月1、5、6、11～19、21～27日条。

123) 前掲『東京大学百年史』部局史1によれば、二等4名、三等4名であった（185頁）。

124) 矢部貞治「帝国主義の経済的考察」1924年11月27日（『矢部文書（政策）』16-162）。

125) 同上、第2～4画像目。

126) 矢内原の国際社会主義については、赤江達也『矢内原忠雄』（岩波新書、2017年）61頁以下参照。

- 127) 前掲矢部「帝国主義の経済的考察」、第158～160画像目。
- 128) 同上、第160～162画像目。
- 129) 詳しくは、前掲『近衛新体制の思想と政治』第5章、有馬学「誰に向かって語るのか」（酒井哲哉編『岩波講座「帝国」日本の学知』第1巻、岩波書店、2006年）参照。
- 130) 矢部の「大東亜共栄圏」論と「アジア連合」論の連続性を明らかにしたのものとして、佐藤太久磨「〈アジア〉への回帰」（『史叢』93、2018年）がある。
- 131) 井上勝生「札幌農学校と植民学の誕生」（前掲酒井編『岩波講座「帝国」日本の学知』第1巻）。
- 132) 後藤新平の満鮮旅行については、鶴見祐輔（一海知義校訂）『決定版』正伝・後藤新平』8（藤原書店、2006年）471～477頁参照。
- 133) 第一高等学校寄宿寮編『向陵誌』（第一高等学校寄宿寮、1925年）353頁。
- 134) 矢部が煩悶青年となった正確な時期は特定できない。一高1年生の時の日記がないからである。矢部日記は一高入学「以来」「直後」から始まるとされているが（『矢部貞治日記』銀杏の巻〈読売新聞社、1974年〉はじめに、『矢部貞治日記 欧米留学時代』〈矢部堯男、1989年〉序）、誤りである。矢部日記の最初の記事は1921年3月21日、1年生の春休みから始まる。実際、日記の初めの方の記述を確認すると、「学校の成績が発表されたと云ふ。一年に落第生が四十人あるさうだ。」（1921年3月28日条）と書いてある。誤解が生じたのは、矢部の一高入学が9月入学の最終年度1920年9月（17歳）であることを見落としていたからであろうと推測される。1921年度から4月入学となるため、1920年度は第三学期を省いて、3月16日～4月15日を春季休業とし、4月16日から1921年度の授業が始まった。参照、第一高等学校編『第一高等学校一覧 自大正9年至10年』（第一高等学校、1921年）41頁、同編『第一高等学校一覧 自大正10年至11年』（第一高等学校、1922年）72～73頁。前掲『第一高等学校一覧 自大正9年至10年』100頁の生徒名簿で、矢部の名を確認できる。
- 135) 矢部貞治『政治学講義要旨』（非売品、1937年）2頁。
- 136) 水野直樹「朴錫胤」（『講座 東アジアの知識人』第4巻、有志舎、2014年）。以下、朴に関する記述はすべて水野論文に拠る。なお、鄭鍾賢（渡辺直紀訳）『帝国大学の朝鮮人』（慶應義塾大学出版会、2021年）は、朴を「大陸侵略の先兵」となった代表的人物と評する（108頁）。
- 137) 『矢部貞治日記』銀杏の巻（読売新聞社、1974年）68頁。前掲水野論文、339頁。
- 138) 安倍の倫理を受けた授業筆記ノートが残っている。「〔矢部貞治ノート（第一高等学校時代7）〕」（『矢部文書（憲政）』109-7）。安倍は、矢部が2・3年生の1921・22年度に倫理担当の講師であった（『第一高等学校一覧 自大正10年至大正11年』125頁、『第一高等学校一覧 自大正11年至大正12年』127頁）。ただ、矢部がどちらの年度に授業を受けたのかはわからない。というのは、1918年の新高等学校令制定にともない、翌年度から施行された高等学校規程が定める学科目に倫理はないからである。それまでの大学予科学科規程（1894年制定、1900年改正）では、倫理は3年に毎週授業時数1と定められていたが、それがなくなり、新たに哲学概説（3年・毎週授業時数3）が設けられた（『第一高等学校六十年史』1939年、293、364頁）。安倍の倫理は、哲学概説の読替か、随意科目か。前者なら3年生での受講だが、後者なら2年生の可能性もある。
- 139) 安倍の朝鮮時代の生活については、金光一「安倍能成と朝鮮」（『宇都宮大学国際学部研究論集』41、2016年）。安倍の朝鮮観の総合的検討としては、中見真理「安倍能成と朝鮮」（『清泉女子大学紀要』54、2006年）参照。
- 140) 「悲哀の美」の意図については、中見真理『柳宗悦』（岩波新書、2013年）99～100頁参照。
- 141) 前掲『矢部貞治日記』銀杏の巻、60頁。
- 142) 古井喜実「矢部貞治」（『鳥取県百傑伝』山陰評論社、1970年）135頁。
- 143) 矢内原の朝鮮論については、幼方直吉「矢内原忠雄と朝鮮」（『思想』495、1965年）、米谷匡史「矢内原忠雄の〈植民・社会政策〉論」（『思想』945、2003年）などを参照。
- 144) 前掲『矢部貞治日記』銀杏の巻、60頁。
- 145) 講義名と回数については、史料に食い違いがある。教授会資料を用いた前掲『東京大学百年史』部局史1は、1924年9月に「冬学期科外講義として南原助教「国際政治」（一〇回位）開設決定」とする（1841頁）。一方、丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』（東京大学出版会、1989年）では、「国際政治学序説」「五回ばかり」とされ、先行研究ではこちらが参照されてきた（たとえば、二宮三郎「日本の国際政治の開拓者たち」『流通経済大学論集』27-1、1992年、47～48頁）。しかし、この箇所は南原自身の言葉ではなく、福田歓一の「題目は「国際政治学序説」です。岡義武先生はそれを聞かれたそうです」という質問であり、南原はそれを否定も肯定もせず、「まことに申しわけない。冷汗が出るようなものです。ともかく、カントの永久平和論を背景にして、五回ばかりやりました」と答えている（130頁）。福田の情報源である岡は、回想で「国際政治学序論」「数回」と記す（「南原繁先生を偲ぶ」丸山真男・福田歓一編『回想の南原繁』岩波書店、1975年、127頁）。ちなみに、矢部日記には「国際政治序論」と記されているが、この日以外に記述はなく、講義が何回おこなわれたのかはわからない。同時代史料の『帝国大学新聞』は、「新しい学の誕生 南原助教により国際政治学序論開講さる」の見出しで報じている（1924年11月10日3面）。したがって、講義名については、教授会では「国際政治」であったが、南原が実際に講義の際に提示した題目は「国際政治学序論」であったというのが真相で、「国際政治学序説」は福田の聞き間違いか誤植であったと結論付けられよう。回数はなお不明であ

- る。ただ、教授会でも「一〇回位」と曖昧であったから、南原がいう「五回ばかり」でも許容範囲内であろうと思われる。
- 146) 前掲『聞き書 南原繁回顧録』129頁。
- 147) 南原のカント論については、荻部直「平和への目覚め」(『思想』945、2003年)参照。
- 148) 前掲『聞き書 南原繁回顧録』129～130頁。
- 149) 同上、131頁。
- 150) 本稿では、『南原繁著作集』4(岩波書店、1973年)を用いた。
- 151) 丸山眞男「解説」(前掲『南原繁著作集』4)586頁。
- 152) 「[矢部貞治ノート(昭和期9)]」(『矢部文書(憲政)』110(09)第2画像目。
- 153) 『政治理論史』における定義は以下の通りである。「政治は一般的に言って、社会共同体の統制であるが、単なる統制でなく、正しき政治——正義価値実現のための統制である。言いかえれば、所与の社会共同体秩序の単なる保存や維持ではなくして、より善い秩序の建設、理想的な社会共同体建設への不断の創造である。それは意欲し、情感する人間の社会共同生活における諸目的とそれを担う諸力の対立・闘争を前提とする。そして、それを調節し、統合してゆくところに、社会共同体の統制がある。」(前掲『南原繁著作集』4、11頁)。
- 154) 10冊目は、1941～45年度の政治学演習における議論を速記したメモである。「[矢部貞治ノート(昭和期10)]」(矢部文書110-10)。表紙には「政治学演習」とある。テーマは、1941年度「国防国家の研究」(9～11月)、42・43年度「昭和大東亜建設の研究」(42年度は1～3月、43年度は9～10月)、44年度「国内体制強化の研究」(3月)、45年度「新日本建設ノ研究」(10～12月)と記されている。矢部は海軍省等の省庁や国策研究会等の民間シンクタンクに参加し多くの献策をしたが、政治学演習での学生との議論もその一貫に組み込まれていたようである。なお、政治学者の神島二郎は1942年度の演習に参加したという(神島二郎「私の先生④ 矢部貞治先生 端然と酒をくみ談論 いまも生きる言葉の数々」『朝日新聞〔東京版〕』1962年9月17日夕刊3面)。
- 155) 矢部貞治「メモ 政治学史」(1934年4月1日、矢部文書13-347)。なお、この作成年月日は誤りである。日記によれば、このメモが書かれたのは4月23日だと考えられる。この講義への出講が決まるまでには行き違いがあり、4月12日に内諾、19日の教授会で承認された。つまり、1日にはまだ出講は決まっていなかった。講義は24日から始まるが、矢部は雑誌論考や辞典記事の執筆に追われ、準備は前日23日の夜にしている。なお、依頼主である法政大学の木村亀二からの手紙も残っている(木村亀二「矢部貞治宛封書」矢部文書56-87)。

(2022. 1. 21 受理)

表6 南原繁「政治学史」1925年度講義の内容
 選択科目（第5学期（夏学期）・毎週授業時数4）
 開講曜日：火曜午前・木曜午前

目次	日付	目次	日付
緒論	[4/14 (火)*]	第二章 羅馬ニ於ケル政治思想	
I 政治学史ノ本質		第一節 緒言	
II 政治学史研究方法		第二節 Polybius (204—122B.C.)	5/28 (木)
III 政治学史ト関係諸科学		第三節 Cicero (106B.C.—43A.D.)	
IV 政治学史研究ノ類型ト時代ノ ^[ママ]		I [タイトルなし]	
第一篇		II [タイトルなし]	
第一章 希臘ニ於ケル政治思想	4/16 (木)*	III 国家論	6/2 (火)
第一節 緒言 (思想ノ背景)		第四節 羅馬法学者ノ政治思想	
第二節 啓蒙期ニ於ケル政治思想	4/21 (火)	I 自然法説	
第一款 Sophist	4/23 (木) 休講*	II 主権説	
I 時代		III 社会制度論	
II 思想		第二篇 中世	
III 批評		第一節 Jesus 及 Apostel (使徒)	6/4 (木)
第二款 Sokrates (420B.C.—399)		1. [タイトルなし]	6/9 (火) 休講*
I 生涯		2. 教父 (Christian Father) ノ政治思想	copy
II 倫理観		§ I 概説	
III 法律政治論		§ II Augustinus	
IV [タイトルなし]	4/30 (木)	第二章 中世前期ノ政治学説	
第三節 Platon ノ政治学説		§ I 緒言	
I 緒言		§ II Salisbury (1115—1180)	
II 倫理説		§ III Thomas Aquinas	
III 理想国家論	5/5 (火)	Chap. III 中世後期ノ政治思想	
IV 現実国家論		§ I Dante Alighieri (1265—31)	
V 社会制度論	5/7 (木)	§ II Marsilius von Padua	
VI 結論		第三篇 近世	
[第四節]		Chap. I Renaissance 時代ノ政治思想	
第三章 Aristoteles (384—322B.C.)	5/12 (火)	§ I Machiavelli	
I 緒言		§ II Jean Bodin	
II Aristoteles ノ倫理ト政治		§ III Althusius (1599—1638)	
III 国家総論		§ IV Grotius (1583—1638)	
IV 現実国家論	5/14 (木)	Chap. II 啓蒙時代ニ於ケル政治学説	
V 理想国家論		第一節 Hobbes	
VI 社会制度論	5/21 (木)	§ II Spinoza (1632—77)	
VII Aristoteles ノ結論		§ III Leibnitz	
第五節 希臘末期ノ政治思想		§ IV Locke (1632—1704)	
第一款 Epikouros 学派	5/26 (火)		
第二款 Stoa 学派			

・「[矢部貞治ノート（昭和期9）]」（『オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺』110-09、原本は矢部家所蔵、衆議院憲政記念館保管）をもとに作成。
 ・「日付」のうち、*の箇所は「矢部貞治日記（未刊行部分）」（『オンライン版 矢部貞治関係文書 補遺』9、10、原本は矢部家所蔵、衆議院憲政記念館保管）で補った。